# 茗會文抄

三

489
3

15
巻

東洋文庫

# 茗會文談卷之三

目録

㊀總角
㊁無花菓
㊂口耳の間四寸
㊃助語
㊄飯
㊅唐四百州
㊆日本七道

八 奏樂
九 クラハス
十 為の字
十一 佛號
十二 烏
十三 性悪の説
十四 細馬
十五 勘當
十六 一日の始
十七 蟻
十八 風梧隨筆
十九 租税
廿 年歯
廿一 老醫の説
廿二 父子不和
廿三 月中地影
廿四 神道
廿五 魚一折

㊀ 宗脉
㊁ カワヤ
㊂ 如是我聞
㊃ 人九
㊄ 酒嚢飯袋
㊅ 舵
㊆ 癖
㊇ 櫻
㊈ 字ツキ
㊉ 嫡庶
㊊ 神體
㊋ 中元節
㊌ 注連縄
㊍ 神籬

# 茗會文談巻之三

錦城　大田元貞才佐　著

## (二)總角

あげまきとよむ童子の髪上へあげてまるく
まくゝ丸あり世説ゴ雨丸髪皆も見えたり詩經
ゴ總角北兮ともあり北、説文ゴ束髪貌も注す此
字象形あり髪ろくもりあげその末を左右へさ
げたり今の鎧のうしろゴ大袖を飛かゆるもの
ものをあげまきといふそのひもの結ひさゴ總

角の髪ヨ似ルモノ

㊁無花菓

いちじくハ和語ヨあらずして種むらし
日本ヨハ古きものニ本草の異名ヨ映日果ト
ありえいじつくとも読を轉じていちじくと
なせり

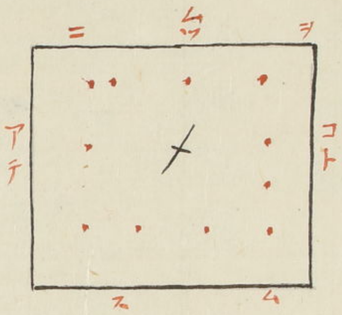
㊂口耳の間四寸

荀子の書ヨ口耳の間四寸のみなり今の金
尺ヨて四寸程あり周尺のつもりヨていハ
だみぢかし荀子周尺の人なり周尺ヨていひつ
らんちかぢかヨ覚ヨあし

㊃助語

日本のいろ〳〵へ文字のさゝんある頃經書を

よむる字の四隅と中央朱をそて点を施して助語のあるるしちせり




かくの如く其外るも法ありもぞくはゝくハ知り侍らず

を点より始まれりと覚も四声を点する法あてよめば四隅の助語てあをはちよるる、ふり

此説大よよしとそおもふそのはゝあてその法をほぞろす時ハ四隅ばかりあらん外ハ追てあるけるか

又これやらんのいひけるハ此法論語首章字而時ふ之をあらはゝちふより事おそれりと思ふもあり

## 五 飯

飯ハいひあり めしもいふべからず いるゝ
ハ唐も日本もをゝいひ めしもハ むしあり婦
女のかゝるもなきなり

㊅唐四百州

伊藤東涯制度通ニ唐ヲ四百州ト云フ呂東萊
紫微詩話をひらきて李方州贈汝州太守詩云安
得吾里四百州皆如此邦二千石又水滸傳一條桿
棒等身齊、打四百座軍州、都姓趙なゞよりいひ来
りし

㊆日本七道

日本七道の内西海南海の二道ハ唐宋の道ニ
のごとく一團の地なりその餘の五道ハ帶の如
くほそ長くとゝりて是ハそのかゝ道もいふ字
よりづゝ東西往来する道筋もおなじよりて

ふり唐宋の道のごとく山東道あれば山東中の諸國往来の道東西南北いくらもあるなかにあり一すぢの道といふはあらず東涯もあるべきなり

て說をはられたり

## ⑧奏樂

樂をうたづるもはいふまでもきまりのあるべ琴琴などかきれる言葉あり かきたづるあり樂一と

び綸を更るを奏といふ かきたづるをまはあらず。

## ⑨クラハス

今人を打つをを俗よんでいふ光山堂外記云鄙語謂連打為蹇也 和漢ごろあるべ

## 十 為の字

世の人為の字をあすそよむより義を誤まるを
おほえ人皆可以為堯舜とハ堯舜をすゝしもゝ
その一章ばかりの為の字皆去れより生じてす
るもよまねばうゐはずあすもよあば成の字も
あるあり天下の人いうんぞうゐ堯舜の大徳
をあすをを得ん孝弟をするは即ち堯舜のする
所をするあり吾堯舜まあらざれハ堯舜のす
る所は得ぬもいふすぎあし顔子でもきの聰
明の資質ある人堯舜のする所をゝてやまずん
バ堯舜の大徳を成就せん然るに是は千万人の
一人あり顔子の答て孟子に有為者皆如此と
ありての為の字てゝの為も同し王陽明の中為
聖人といふを志ちすもいたゝ〳〵ハ聖人の大徳
をあすもいへる心もあはる然らは もろゝし
の人も為の字を心得違へるもあるゝ為ハ造
作の訓あて成就の心あし

## 十一 佛號

客廳の番直（ばんぢき）する人ありて片隅よりて物書くをうれば一枚の紙を横よりて細字に南無大慈大悲觀世音菩薩と數百書つらねうり何故かくはうり玉ふやともあるかくすれば中觀音の利生を得て極樂國に生れ佛ともなると答ふ

その紙はいくらでもうるとぞ云

ゆふべはんべるを御主人の姓名を戲れまいふいまそもへばとぞ御主人の姓名をさのでもくは書つらねうるんあハ人のあらず不敬もいたんゆゑよんべる畫さんまは主君をのらふもせん然れば觀音ともて悅ひ玉はもらへりて仏罰はやあるらん其いもまて今生よて觀音もあらんうそ願ふべけれ今生よて仏もあらんいうぐ大慈大悲ともい慈悲の大あるをいふ慈悲ともい人を濟度するもり人を濟度する

は人の為に成るゑ先眼前に人の為に成るこ
ちを修行すべし眼前に人の為に成るこちゝハ
父ゝに対しては親に対しては親の御こゝろ主人
に対しては主人のけこゝろ親のけ為に成るハ
孝あり主人の御為にあるハ忠あり是より無人
に及ぶまで皆かゝのでしゝならば是を大慈大
悲ちいふ是観音の境界あり今生にて観音の境
界ちならば後生にて仏ちなる位にはなるべし
無用の陳ついへに仏名かきあらぶるべし玉ふに

と申侍しその人いらゞ聞取けんちらず

## 十二 烏

からすハ極めて鄙陋(きたなき)の鳥ありその雛の時ゝちゝ
ばしをひらきて親鳥のたゞゝむをまつすゝこ
長すれば親鳥の口だゝの動ゝをみればおのれ
がゝちばしをおしゝゝみ親鳥の喙中の物を食す
るあり是を脚ゝより見れば子鳥の方より親鳥の

喙中へ食物をいるゝに似たりてれを見誤りて
反哺の説出来れりとある人の申侍しさもゆら
んと覚ゆるゝ
かくいへば孝道をせふるに似たり然るに者も
いふは人のする事にて鳥類にはつらゆる事ふ
らず孝を鳥獸にはつらゆるは孝道のおちろへ
そろより起れり鳥獸を親をしらず無道あるを
見て人はあのごとくなるべいせぬものとかつりら
るゝそよけれ

ふの外鳩に三枝の礼あり蟻に君臣の義ありふ
ぜいふの類推して知るべし

## 十三 性悪の説

荀子性悪の説に従ひておよそ人性悪なりとい
ふ証拠にあるべきをかんゲへ有るべうゆふ
き事をもふふる人ありされらにいふまゞきを
ふるべしいそりてうろきをみていたと小兒の

障子の紙をやぶりまくり捨るを見て是悪性の
ある所と夫婦なるまとをするといふふ
りてゐらハ親の方おけふより障子を改めんと
する時あらばあらりいまあずかりてとく
手傳ひをするあぜいひてゐの儘ゐすべし
小兒の時紙をやぶるをよ〳〵共あ〳〵共おもふ
心あらんや無心なるとあるとあらしき
障子紙あれバあ〳〵き事をするといひぬるき障
子紙あればとき手つくひをするといふこふ大

人の方より名つくるあり
虎狼の人を食するハ其性なて數多の人をさし
血をすふもあるとひゐれをあ〳〵き事とおも
はんやその性然りおのれが身をやゝおふ仁の
類より人より見れば大悪不仁あり人の魚鳥を
ちりて食する同し魚鳥のためハ人ハ虎狼ふ
り荀子ふぜは一人の見識より說を立て天地よ
り見るとあとはぬ故ゐ性善の說を得合点せざ
るあり

## 十四 細馬

太平記ふぜよ細馬よ御をかませちあり余始め細馬ハいろふる馬といふを知らず北魏の史よ代谷の馬は皆細馬ありもいてり猶其義を知らず後よ推蓬寐語といふ書よ唐制凡細馬次馬送尚乘局と見えたり然れ心良馬を細馬といふ尚乘局といふは天子の御厩より

## 十五 勘當

勘當の文字ハ續日本紀養老二年よ出たり人をいましめるとも見えたり源氏物語よかんだうの詞あり又人をもちがもるをかうし玉ひもをいつり勘の字をかうもよあるあや又ハ考の字か

今の世父子師弟の間義絶するをいふはあや

まれり此二字もし唐律より出るか可攷

## 十六 一日の始

ある人のいふ今の世夜九ツ時を以て日の始とするハ非なり近来暦家より此事を主張していへるハいよ〳〵非なり子の月子の正月といふ時あらば子の時を日の始とすべし今寅の月を正月とすれば寅の時を今日の始とすべしとなり

さもあらんか

## 十七 蟻

生る物にて蟻ハ尤微なるものゝそのたいまはる時は頭をさゝあて、過るより唐詩に階蟻相逢如偶語と作れり然らば もろ〳〵の蟻もつゝ自らはるゝもあるし宇宙の間もろ〳〵しるふきものやまもよありやまもよあきもの天竺に有も

せねもしいづくとするものあらばその性
は皆わるし蟻まて証すべし併しそのかうちい
所まとりて少々づゝのちがひあらん
蟻まてゞまあらは性はうたがらし人は至りてお
ろかなれ共此処誤字あらん國まよりその性てもこ
ちはいふまでき事なり
然らばそろそろの人わが國の外にうふ夷狄も
称して禽獸同前まる見あすハ天地の道をたがらず
人物の性をたがらぬちいふへし聖人ハ然らず故
ま孔子ハ九夷まる居らんとの玉へり

## ㊥風梧隨筆

何人の著述もいふを知らずそれまる　後嵯峨帝
龍潛の御時六月十六日嘉定錢十六錢をもて供
御の物を買しめ玉ふ踐祚の後此例をもて嘉定
會を始め群臣まる分ち玉ふちいへり
又いふ男子歯をそれもるハ鳥羽院より起る事恵

明院僧□記ニ見えたり ちい一り

## 十九 租税

世間ハ元来何事もおきものあり孟子ニ事ヲきゝ所ニやる智もなく大きりもいりてそこ小人出て事をもる故ニ種々の事を生ずる

租税の一事ニつゐていをて農民ニてれほどの地面より ハ是程ハ上へさゝげべしてれ程ハそ

の家内をやゝ ふへも定むるにて事すむそなり小人出るより上より ハおほくもらんもし下の小人より ハ少く出さんをす是より役人を置て其姦を察す一人の耳目をらざれば人を多くすその中ニ又奸人ありてつゐニ賄賂行はれ上へさゝぐる物ハ減し役人のさやしちある宋の王安石の新法のついへゝくのぞもし上も下も誠の心ニて事を処さば何の障りあらん其所々のかゝらゝ農民を撰ミて役をもらゝもべしよ

人つとむるとも三五年ツゝまて改めてまばら
まつもめ さすがゝし上ゝる人そゝその奸を察す
るのみ

## 廿年歯

年歯をもてみづからもるすゝ傲まりも古人も
老人をいまゝあけりおよそ老境よいとりてゝ
外見をかまはあ心ま髪もけづらず衣紋もそゝ
さずおもての垢もあらはず威儀をもうゝふは
る有様まて上座まのぼりて恥る氣あし是より
は外聞をもうまはぬ心ちふり終るは得の一字
まひうされもて行ふり吾人つゝむべし

## 廿一老醫の説

万葉集の歌ハ物は皆ほゝらゝきてそ人はそゝ
老ぬるのゝぞよろるべしかゝれば およそ万物

ふるくてよきハあらし書の說命の篇ハ人只旧器
只新もありされど德ある人のふるきハまたも
よろくろそ德なき人のふるきハわろきまあも
れり世故ハとるいろ〻つき欲ふらくかゑ喜地
ハ人ぜんてきそふくとろきそれをろもくく見
下しおのれのミ得そりちす
醫者ハ誠ハふるきが病功もあらんちおもへど
是もある老醫のいひけるハ療治するハ年よん
ハ心ひろれよとくもひ功くる事のあらぬも

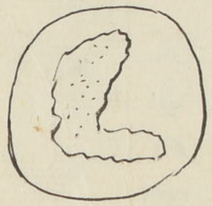
のといつり

## 廿三 父子不和

世ハ父子の間も不和ちハありて物いひのあ
るがおほきものありて子のかくをいまゝむるハ
勿論の事なり折ふしハ父の方をもいまゝあて
ろうるべきならん歟

## 廿三 月中地影

月の中の黑き処を地影といふ説さもあらんえ
のさま大やうくのでもく



南の方は黑処あく東北の方は
おほく下西のかたへさがれり
西の方へ入る時はさらしまは
あるまれば黑処のさまもさら
しまはるべきよ東より出る時并ま中天の時
まかはるもあしいらふるもあるもおもふは遠
きもあるより
たとへば海上をのぞむる雲ハ湖の中より出て
る如くあり雲ひきくまあらず水とうきまあら
ず是まく遠きもあるありそのとけハ知れらくし
月の人の目うて見るハ西ま行くもたるうある
をいつまでも平行ま見送るとあり轉する時分
ハ人の眼力まハえずもたるま西ま入らんちす
るもやはり平行の時あり黑処のさらしまあら

あるて知るべし

## 廿四 神道

余が家は齋部氏の神道を傳へて世に行はる神代直指抄は余が家より出たりその原本今に有先人もてのうて見玉ひし神代紀中に肝要の語は伊弉諾尊の女をのうちてりまたがりたの玉へるぞ神道の奥儀といふべしちありき

## 廿五 魚一折

魚一折菓子一折といふ折ちは檜の木の長きそぎ板を四所折らべめて四角なし櫻の皮にてぢくる物なり古歌にあふみあるひもの、里のかは櫻花をはらきて折る人もあるとれ折るといふ縁語をもちてよめり

今は ふちをひきくし 釘もさし漆もて塗り足

をもりをきすて臺と名付とり然れ共文の言
まは名を存して折もいふめり 論語は觚をあら
ず觚あらんやくくもあり折、折らず折あらんや
くもいふべしもれらし人の子もして父母を
養はずんば子あらんや 人の民もして家業あく
んば民あらんや

## 芸 舵

昔のかぢといへるはすべて引のもこと
契冲いへりさあるべし万葉の歌は まかをし
げぬきとよめるハ大船の左右は櫓をしげく立
てるあり今いふかぢハ舟をひとつのものあり
舟を正くするの具なれども舵と
いふ源重之の
ものをとる舟人かちをさへ
もよめるも櫓らの事なり舵はあらず 何れの
時よりか梶といふ字を作りてかぢとよめり舵

の字をいまゞ知らざりける事尾をいふ字を
用ひそれば舵のてちがるべきを明らかなり櫓
かいハ舟の足もいふべし尾をはいふべからず
然らば古舵ハ古りしやもまゐふ左まはあ
らずいまゝハ事すくまれば櫓楫も舵もす
しふへてかぢをいひけるまてそ

## 芒 癖

大人よわしふへてひとつの癖あり群臣万人の
上よわはす故臣民よおもりてハあふぎられん
そおぼするよりより自分の智をならはさんもた
是より諫をふせぎ非をかざり玉ふ事臣民よ
おもりそるを恥玉ふはそそりまれば臣民よ
りまさり人物よあらんもおぼすべしさ思し玉
はんまは後世を願ひ玉ひてもあらず祈禱を頼
ミ玉ふてもあらず諸藝よ通じ玉ふてもあら
ずそ学問の一すぢ人の神智をまして君子も

あり玉ふべし君子も成玉はゞ臣民ハ皆おそれて心服すべし此学問といふもとゝ詩文をよくして唐人めきゝるとのゝゝるてハかゝりて人よほとり世よたゝぶりてゝろし實学躬行を尊びて其所よ至るべしさふゝてハおほき臣民の内まれゝ君よまさりゝる人ありてあるぢるものゝゝん慎ミ玉ふべし是君心の非を格しゝするの一ツあるべし

## 共 櫻

ひゞ國の櫻ゝゝるてハ何といふやゝてゝらあらず文選の詩よ山櫻をつゝれるハ今の一重ざくらひかん櫻あるべし益部方物志よ重葉海棠といふをあげゝるゝて海棠よ數種あり又時よ小異あり只其盛成る者ハ重葩疊蕚よてよろゝび愛すべし定種あるよあらずといへり是よゝ江戸ざくらふぢよ似ゝり日本よてい

ふ海棠ゑ重葩疊蕚あるハあるし是ハ棠梨甘棠
林檎ふたの類なるつくし
およそ海外より来れる草木ハ皆海の字を蒙ら
しむ然れハ日本のさくらハ蜀の重葉海棠より
この益部もいふハ蜀の事〻蜀の北ハ西南のた
てん三吳の地ハ万里隔りそれは目ゑ見ざる
人もふければ繪ゑもかゝぬ成てし

## 芸字つキ

今書籍をよむゑ字つきをいふものあり貴人ゑ
讀書を授る時此字つきをまいらする礼あり其
制竹をほそくけづりたけハ書籍の程ゑて本の
うゝゑて節をこめゝり授る人是をわきめ置外
の字つきを用るゝもゑ あん三輪執菓子のもの
語ゑり
もろゝゝるゝてハ何も各つけゝるやゑ おゆゑ孔
子家語又史記田敬仲傳世家あり孔子讀易韋編三

絶鉄擿三折漆書三滅ちあり今按するに此傳は
孔子讀易韋編三絶等のたぐひなるし又金氏談録曰
宋王の王注いたく古事相承傳用而不見出処者甚
多如顔回讀書鉄擿三摧是其一也この鉄擿蓋
字つきのでもと見えたり是を經橈といふるや
後漢劉尤經橈の銘あり兩伯橋の茶話に今の
もろこしにこれを丁馬といふもちるさんたり
余さきに此等の名ありるを知らざりしてろ字
杖と名つけ置侍りしあり經橈の名まされり

## 卅 嫡庶

ある人のいふ家に嫡庶の分をたて長子に世ら
す家を継すハ無用ありいづれにてもかしてき
をえらみてつかしむべしちあり
これ權をたりて經をたらぬあり昔京に富る者
あり三人の子をもてり太郎ハすこしおろかに
り二郎ハ頗る怜悧あり父これに母づらんもま

もひやく言るもあらはせり年の長するを待け
る内ハ二郎私ハ商をあし大ハ金銀をうしふへ
り父大ハ怒り此心をやめ三郎ハゆづらんらた
ゞし太郎もさゝる過失もあければ是ハ継しめ
んかも思ふ内ハ父頓死〜てけり
三人の子どもこれ跡をらんくとはらそひ親
戚の諫をもまもらず死者をさし置てあほやけ
ハ許けり
親の死をも悲〜まず兄弟ほどちり家をはら

そふハ乱民ありもて父の弟の有けるをめし家
を継がせ三人の子供ハ叔父の心ハ任すゞらも
さばき玉ひ〜ちゝ
嫡子を立るハ経常の法ふり庶を立るハ権をふ
すゝすろし異ふりも嫡をとて一の〜てき二男
ハたすけをあさ〜むるを當然ちす只かしてき
を立るもいふハ定もれハ庶子どもかしてどて
をつくりて父の目をくらますてろろ出来るふ
り隋の煬帝の覆轍見るゞし万のを経常を迂

濁りなし權を行はんとするは亂の本と心得べし
子思の語に聖人權をいて教へずとは是をいへ
るべし

## 廿一 神體

凡叢祠の神体は其祝部の神するともあれば外
人是を知るべからず大てい神代の神なり
又天地山川の神あらば神といはるべし幣は

ぞうて、神明をよするうたるは幣といふは
元来きぬをきりうちて神はすくもるあり神を
うすべき物にあらず真臘記に云真臘國は宮觀
はあれど別に像あること一塊の石をおく中國
社稷中の石の如しもいてり中國には唐土をさ
していふもろてしの社といふは土地の神を祭
るなり土をつき封し神仏もするともあるに此
文を見れば後世にありて又別に石を神体とせ
りと見えたり

日本にてもさるやうのものありと傳へ聞又　串
を箱へ入て神のしるしとするなり心得がき
とす

## 廿二 中元節

乾淳亭時記に七月十五日は道家是を中元節と
いひて各齋醮の祭あり寺にハ此日盂蘭盆の齋
あり人家にハ此日先祖を祭る通例新米新醤
油

人だものを用ひ人〻素食するなり魚肉をうる
ものの市をやむといへり是によれば中元の俗祭
は盂蘭盆によらぬなり
余津輕に在しに其俗七月十四日の暮がた櫻の
皮を門外にたき幼少の子ども
おちふ　おちふ　むまてろのつくつきのつく
木ちらく
とゝふふるこ十五日にハ墓祭をとゝらする
なり是も國風にてらんほん盂蘭盆の業か誤か

まあらずと見えたり

## 廿二 注連縄

むかしたりしめ縄といへりたりへをさめたゞ
むるの義あらんか天照太神のいとやより御出
ありしその跡よりくめ縄をひきてとし又ふ
帰りいりまへそと中臣と齋部の宮まるヒ玉へ
り後世神のやしろまちあをひくハ此意もは違

へるが如し此ため縄を注連といふ顔氏家訓
に今の世喪ありて葬の出る時は門前に火をた
き戸外に灰をつらね道家のふゞをはり注連を
ひくあゞの類人情に近らずといへり
日本にても今葬送の出る跡に火をもやす死
者不祥の氣家に入らしめじとなり
此時注連をひくも死者の魂を再び入れじとの
為より家訓にいまへめるハ子たるもの親の
死し玉へばもてなくハいとまなくむハ人心なら

ずちいり

## 卅四 神籬

旧事記ニ高皇産靈尊勅曰吾則起立天津神籬及天津盤境於葦原中國亦為吾孫齋之ちあり

日本紀神代巻ニ　ひもろぎされこり　神籬はひもろき盤境ハいたさちちむ此和語きろえが

ときあり旧事記の作者此種字を（種は蚤の誤りか）あて、其義を知らせんれば和するこもるハあらざるべし文字ニよりて見れハ　ひもろきハ祠廟ありいたさちハ神靈を安置する石函ありもろてしまても古石をもつて神主を藏る櫃ちするこもあり纂緒ハ叢祠兆域も解せらる叢祠はさあるべし兆域は墓をいへはあくまゆらすさいろんのこまてそのいつれ祭る神ハいつれもあるさず推して思ふる國常立尊以来の神靈をてめ玉ふふるへし

林羅山のつくる神道抄中ニこのこもを論し

卜部家も平野家も是より訴論まで有るとも
ともかく卜部家のいふる所も信用せぬさまま
訴れたり

## 廿五 宗脉

何れの時まか僧も儒者もの論ありし時僧いふ
我仏法ハ釋迦より何代祖師より幾世も傳来あ
りそれとハ孔子より何代でもいひければ儒者
語ふさがりて答あしよりて負けりもおん後世
儒者ま見識おく只詩文を作るのみまて道を知
らず故まかく浅まくきたちゆゑゆゑ見識あ
らば我聖人の道は天下の人でもまあり是天よ
りの直傳あり傳来まよりてこつ道まはらずそ
ふとの道ハ傳来ふければ断絶するやも答ふ
べし

## 廿六 カワヤ

人の生れつきは迂闊なるも聰敏なるもあり迂闊なるは害なくまた又古風を失はず聰敏なる人は学術あければ多く功利をふぐる予が先人は物はきそはぬ人なれて老後はほもんぜ司馬徳操が流あり

或る時人ありかん所なるを問玉ひ婦女子にそさいいつりかはやもそいふべけれ旁は人ありやをりせついんあるべきもの

有ば是は尤もの玉へりかん所せついん登厠のとあらんや

かわは外ありやは舍あり屋外はあるものあればあり古を好み名を正すは多く迂闊あり カワやといへば婦女童子の知らぬ事なれ聰敏ある人より見れば迂遠あり

## 廿七 如是我聞

餅まほりものゝ手ぬぐひまぬひものせは無益
の事なりと笑ふべし仏書の発端ハ如我是聞も
あるは記者の語まて仏語まはならず下ま加け
る詞をさゝて我かゝんのごとく聞なひとりもい
へるあり義あるまあらず知るま記する人是ま
一字々々ま道理をつけてもけり
表中郎も託をつけてもけり無益の贅言あるべし國
の名の伊勢ハいそありいそはたやきあり其後
まいせと轉じ即これま漢字をつけて伊勢とら

んのゝ伊勢といふ字まは義あり然るま神道ハ
これま説をつけて天照大神の御徳をいたんも
て伊勢といふ字ハ人平らかま生るゝハたがカ
も宣へるゝといふ大神の御徳ハさるともあれ
ど伊の字のつくりハ尹あり平まあらず勢の字
の上ハ登まて生まあらずミづくらをまろもい
ふは神代の詞まあらずうつ麻呂もそいへた
もはいはず是皆すぢあき事あれど異俗ハさ
れを實も心得るもあり又人家ま言傳ふるか

如きハ皆贅言あり

## 廿八 人丸

世俗ハ人丸明神の符を門ハはるハ何ゆゑも問ふ火止るもいふ又て火災を除るありもいふ又血の色ハ赤ければ火もし婦人月事のもまるもいふもあれば妊娠を守らせ玉ふ御神ありもいひて愚俗ハ信仰せむ愚俗の人いろほも信ずれば也て何の益ありあらん却て識者の嘲りもとそもあれ又

又人麿ハ天照大神と一体ありもいふ續日本紀ハ人まろの名も出ずすつらきの天か下治めさせ玉ひし尊一様ハいさほ〳〵ありしとも聞えずたゞ歌のひじりありも貫之のいへるのゝいうふれバ〻〻る説の出来けるまやその謂れを知らず歌をよくよめばもて国家の益ともあるまゝ且公任卿ハ貫之の歌ハ人麿ハまされ

りもおもけれ けるもし江談抄にも見えたり

## 卅九 酒嚢飯袋

唐宋の間無職のものを酒嚢飯袋とそしれり是けだし漢の秤衡が苟或ハ〳〵みてもまよいあべし其餘ハ皆酒嚢飯袋のたもいつるまゝ本づけりてゝもみてハ穀つぶしもそいあるる秤衡のいへるハ才字機辯あき人より今の世才字機辯あるはまれまれば酒嚢飯袋をもぬられかとしまれも人の人さる業をあさば穀つぶしの名はまぬられんら

茗會文談卷之三 終